

大きくて小さい海

三年 本間千賀子（昭和四一年度）

どこまでも限りなく、広々とした地球の海。それとともに、海の上の空も限りなく続いている。海は、私達の心とは似ても似つかないほど大きい。

その海は、ある時は畳のように、まるで愛の国にでもおかれているような雰囲気にしてくれる。そんな時の海を見てみると、私達の狭い心が広々と落着いてくるように感じられる。海は、私達にこう呼びかける「さみしい時、悲しい時は、いつでも飛んでおいで」と。

しかし、私達の心が怒りを持つように、時には海だって怒りを持つ時がある。台風の高額の損害をみた時、その怒りをさまざまとみせつけられる。そんな時の海って人間なんか手も足もでない。

私達、漁業を営んでいる者には、海なしでは生きていけない。一家の年々の家計をまかなうには、島のような小さなところでは収入は少なく、北海道に出稼ぎにいかねばならず、その数は年々増していく。海を相手の職ゆえ、毎年一定の稼ぎがあるとは限らず安定しない時には首をふりふり家に帰る時もある。でも、その時のお金が少しであろうと、父達の働いたものである。

もうこれ以上の力はだせないというほどの働きが含んであり、汗の結晶がつめこまれている。私達、陸の生活のような規則正しい生活ではなく、漁があれば夜も昼もあったものでない。働

くことということだけが頭の中に刻み込まれている。そんな時の父達の姿は、筆舌に尽しがたい。海のどこにでも漁があるとに限らない。

北海道よりも北方に、それ以上の漁がある。すぐ飛んでいくわけにはいけない。その間には、条約が結ばれてあり、勝手にそこで漁はできない。人間はやっていけないと言われると、よいいたくなるように、父や兄も条約はわかつているけど、規則よりも「今年は少しでも多くとろう。少しでも多く喜ばそう」という気持が強く、条件を破ってしまうのだと思う。運がよい時は、監視船につかまえられないけれども、気をゆるめ、油断していると、スピードのある監視船につかまってしまう。

つかまえられると、もう自分達の力ではどうにもならない。国と国との問題である。私達が思っている海は、広くて大きいはずなのに、なぜこのようなことがあるのだろうか。同じ人間であり、同じように自分の力で働いて食べている。その上、どんなことが必要なのだろうか。人間が発達していくように、住む場所もそれぞれそのままにしておきたい。そして、どこにでも通じる一本の道のように、どの国も手を取りあって、争いなく平和な毎日がおくられるようにしなければならぬ。

これからの私達は、小さい海でなく、大きくて広々とした海をつくらなければならない。